グループ発表

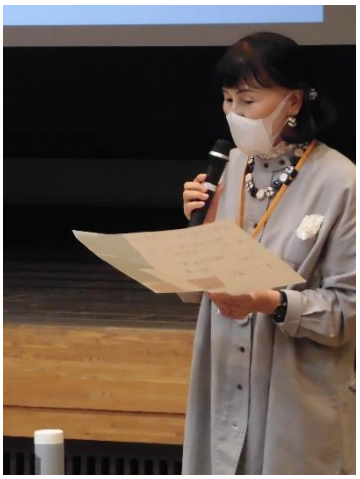
A 班(国立市：江藤委員)

・それぞれの公運審がどのような状況で動いているか職員の体制等も含め、活発な情報交換ができた。
・オンライン講座については、インターネットを上手く利用しつつ、やはり対面を大事にしたいという話になった。顔を合わせる、それだけで子育て世代のお母さんたちは解決するという例もある。
・答申を作っても、それをどう実際に具体化さるのかという検証をしていく必要がある。
・公運審の体制が弱くなってきている。市民の意見をきく場として利用者懇談会やサポート会議もあるが、それがどこまで続くのかという不安もある。コロナ禍だからこそ、団体が集まってお互いの団体の状況を話し合う機会が実は貴重である。

B 班(国立市：隈井委員)

・デジタルとアナログ、対面も重要、みんなが色々な知恵を出し合うことで、色々なやり方で公民館事業ができる。公民館という場所にとどまらず、屋外でも可能である。
・パンデミックは又、来る→みんなで知恵を出し合い、平時の DISC コミュニケーションを大切にしていく。

C 班(小平市：勝谷委員)



・公運審の引き継ぎ時期が各館ずれているので、混乱が生じる。答申作りに時間がかかった。

・定例会のハイブリッド開催は大変であった。公民館はやはり対面が一番であるが、コロナ禍において閉館によって従来、来館していた方々が足を運ばなくなり、認知機能の低下、居場所がなくなったのも現実である。

・公民館は今後、利用者をどうやって増やしていくかが課題である。

・公民館まつりが少しずつ開催されるようになってきた。利用者の減少という問題を抱えているが、以前のように足を運んでくれるようになってほしい。

D 班(福生市：石井委員)

・自分の音楽サークルをリモート音楽祭として発信し、やればできることを実感した。

・事業評価についてはほとんどやっていないのではという話が出た。それぞれの市で異なるが、職員だけで企画を立ててやっているところは上手くいかない。小平市や狛江市では、事業の企画段階から市民が入り、試行錯誤しながら事業評価を行い、次年度にフィードバックしていくことができている。福生市もがんばっていきたい。

E 班(福生市：秋間委員)

・東大和市の佐々木委員からの報告では分科会の積極的な話し合いがなされているが、他市では、諮問を受け、これからの公民館の在り方について考えると正直、どうしていいかわからない現状もある。答申へのタイトなスケジ

ュール、かける時間、委員の負担が大きいのも事実である。

・制約も多かったが、それによって生まれた新しいこともあった。それを活かしながらツールとして、オンラインやデジタルを使いながら、場としての公民館は必要であるということが明らかになった。

・今後は、オンラインを使い、公民館だけでなく、市の他の部署と連携しながらハイブリッド型の事業の展開が必要なのではないか。

F 班(小平市職員：森さん)

・オンラインの公民館側からの配信について、受ける側の能力等不安もある。職員の立場としてハイブリッド形式では人手を割くし、能力が問われる。職員の能力の育成が非常に大切。設備面での配信可能の環境のレベルに差が出てくる。予算面を加味しながら早急に整備していく必要がある。

・コロナ禍で、今まで淡々とやってきたことを見直す大きなきっかけとなり、オンラインの波を良い方向に進めていきたい。狛江市ではコロナ前から、事業評価は取り組んできていた。同じことをやりがちな公の仕事を見直すきっかけとなった。

G 班(狛江市職員：高橋さん)

・コロナ禍において、社会のデジタル化に遅れない、そしてリアルとオンラインの両立が必要と感じる。オンラインへの意識が低いようにも感じる。抵抗と疑心暗鬼もあるが、全体にデジタル化を進行する必要がある。

・デジタル化を進めていくように社会が進んでいる。取り込めるような入口の構築。例えとして、スマホ講座は年に 2，3 回だったが、単発ではなく、継続的に毎月開く位のペースで学び合いの場の継続が大切である。そして、受講者が学び返し、「みんな先生」になっていくような、継続が必要である。多様な世代

の交流、若い世代の方が高齢の方にスマホの使い方を教えたり、教えられたりする環境が大事である。又、年齢層や時間帯の多様な事業開催(朝、日中、仕事帰り、夜間の開催等)も考えていく必要がある。

講評：倉持先生

・今の発表のなかからも、改めて公民館は、コロナを経て、対面や場としての意義を大事にしたいという意見が出ている。施設としての公民館、物理的な場としての公民館であると同時に、公民館ならではの機能や事業、特徴をどうやって今の時代に生かし、再評価していくかが大事である。
・デジタル・オンライン・リモートへの関心が非常に高い。実際、試行錯誤しながらやってきた中で、どうやってうまい形で取り込んでいくか、職員も利用者も抵抗感をなくし、広げていくかという問題意識をアフターコロナでも継続していくことが課題になっていくだろう。コロナがきっかけで、Wi-Fi やオンライン等の設備をつけることができた公民館が多いのも事実である。市によって差はあるが、公民館事業として、オンラインの講座や配信を行ったところも多かった。そしてその中でも課題がたくさんあることが見えてきた。
・評価についても問題提起として事例をあげてもらったことをきっかけに、深められた。
・まつりのように、人が集まる事業を今後、どのように展開していくか。
・諮問・答申は、公運審の委員にとって大きな問題である。どのようなタイミング、スケジュール、リズム、構成で行っていくのかも課題である。今まで、当たり前のように諮問があり、答申があるということだったが、公運審の体制が弱くなってきている中で、どのように議論をし、実質化・検証化していくかを共有することができた。
・答申は提言をまとめるのがゴールのように考えがちであるが、記録することにも意義があり、答申をまとめていくプロセスに於いて色々な団体等にアンケートをとり、声を聴く、多様な意見を集め、共有するそのプロセスが大切。事業の実態や現状を知り、職員と市民や利用者からなる委員が分析し、課題を明らかにする意義が重要である。答申の

プロセスの意義は非常に重要だと再確認した。さらにはこれらの答申をもっと発信、共有していくべきではないかと感じた。まとめて提出で終わりではない。答申を検証し、市民や利用者に発信し、共有し合い、学びあうのも必要ではないか。

・公運審委員の役割がコロナを通して、改めて問い直されている。色々な意見を答申に反映し、共有していけるよう、進め方、関係性の構築も含め、負担感のある中で次の世代にどのようにつなげていくかを考えていくことが大事である。職員の異動や委員の交代がある中で、ほどよい緊張と信頼関係を職員と委員の間で作っていくか、考えていかなくてはならない。対話と合意形成を試みる機会をどのようにうまく、公運審の会議の中、公運審と利用者の中で作っていくかである。

・色々な事例発表やシンポジウム等を通して意見交換がなされたが、今日は結論を出す会でない。それぞれが問題意識をもち、各市の公運審で共有し、活動に活かしていってほしい。また、今回の都公連の企画・運営等も非常に練られており大きな財産となった。

質問・感想等

東大和市：新井委員

・国分寺市のアンケートの結果の後、すぐに答申案の３つの骨格の運びになっている。そのようなプロセスはどのように進められたか？例えば、東大和市の佐々木委員からの説明のように分科会を作り、ステップを踏んでいったのか、そこを是非聞きたい。

国分寺市：戸澤委員

・任期が半分を過ぎ、練る時間が無いのが正直なところだった。公運審を２つに分け、一つは集客事業の開催、もう一つは意見の活発になったオンライについて話し合った。当時の委員長・副委員長の采配の元、これでいこう、それで良いねと言う落とし所に導いてもらったが、抽象的なプロセスとなったのも否めない。

西東京市：西原委員

・みなさんや、先生からのお話を聞き大変勉強になった。問題点を探り出し、前向きに色々考えていきたい。コロナになった時を思い出すと、一寸先は闇で先がわからない不安感があった。当時、公民館が閉鎖され、かなりの緊急時であった。今後、国立市でも答申として、「緊急時に対応できる公民館運営審議会の体制整備」ということも視野に入れているが、私たちはどのように動いたら良いか、どのような形で公民館と市民が関わっていったら良いかを、今一度、考えてみたいと強く想うことができた研修会だった。

国分寺市：本多公民館長

・令和３年４月はコロナ禍、真っ最中だった時に、本多公民館に異動となったため、日々、コロナ対応の対策会議に出席せざるをえなかった。今、ようやく先が見えてきた。公民館は 100%対面の世界と思っていたが、いきなりオンラインをやらないと、どうにもならない状態になった。この会場でも小学校 PTA 共催で教育講座をハイブリッドで初めて経験し、つながる・つながらないという初歩的なところで苦労をし、画面越しの講師の先生、PTA の方々に助けてもらった。徐々に、当たり前のようにみんなができるようになっていった。もちろん、オンラインだけではなく会って話をすることがとても大切であると再確認することができた。

・国分寺市でも教育ビジョンがあり、それぞれの課でテーマをもち、事業評価をし、振り返り等も数値化している。その中でもやはり、基本は対面であると実感した。各市の特徴もあるが、共通な想いもあり、今後も情報共有していきたい。

閉会の挨拶：田中委員部会長

・シンポジウム・グループワークを倉持先生が全てまとめてくださり、また、各グループ内では活発な話し合い行われ、これこそ公運審の話し合いの場であると痛感した。コロナ禍で行政指導期間の中、公民館は不要不急のような風潮もあり、各市とも、どのように活動をして良いのか模索してきた。その一つとして、オンライン化を考えた。オンライン化と言っても予算の問題、機能性の問題等たくさん課題がある。だが、オンライン化により、見えてきたものがある。若い世代、未利

用者への参加が期待できるという声があがってきているのだ。学校・大学・社会福祉施設・ボランティア団体等、多元的な長期関係を築くきっかけとなっているのではないだろうか？従来の対面式至上主義＋オンライン化による新しい次の世代の公民館の姿ができあがっていくのだと思う。

・人と人が集い、交流するという本来の姿と、オンラインでつながりを保つ機能は今後の公民館の活動に、必要不可欠なものと思う。いかなる場合も市民のみなさんが、必要と思ってくれるような公民館であるように、我々公運審としてもさらなる活動をしていきたいと思う。

・「３つの**つ**」→「**つ**どう・**つ**なぐ・**つ**くる」いつまでも継続されるべきものである。公民館は確かな情報の発信力も問われている。

・コロナ禍のような不安な世の中では、「公民館は市民の心のワクチンだ！」と言える。お疲れ様でした。

以上